

東京 IPO 特別コラム

2018年12月26日 Vol.136

株式相場急落の中で

米国株の急落とともに日経平均がよもやの2万円割れを演じてしまった。多くの投資家の皆さんにとって残り2日間での掉尾の一振期待が残るものの、先行きの不安が前向きな投資をためらわせてしまいそうだ。そうした相場環境急変の中でIPO市場もソフトバンク(9434)ショックによる影響からか初値が公開価格を割り込む銘柄が出てくるなどこれまでにない動きが見られる。

基本的にIPO投資は公開前に申し込みをして当たるか当たらないかがスタートとなるが、個人投資家の皆さんの声を聞くと滅多に当たらないらしい。それが今回の相場環境の急変に伴い、ようやく当たったと喜んだのも束の間。19日上場のソフトバンクに続き、21日の自律制御システム研究所(6232)、ポート(7047)の初値は公開価格を大きく下回ってしまった。やっと当たったと喜んでいたら、この株式相場急落の中で需給が悪化し株価急落。これらの銘柄の業績等の良否は定かではないが、自律制御システムのように本来はドローン関連といったテーマ性があっても大きく売られたのは需給と足下の企業業績への不安が重なった可能性がある。とは言え、25日の上場2社(リンク、ベルトラ)の株価は順調な滑り出し。まるで何事もなかったような株価の推移で公開価格を大きく上回った初値に対して、更に上値を追う展開が見られる。同日に上場予定だったひふみ投信を運営するレオスキャピタルの上場延期はある意味サプライズだったのだが、市場環境の悪化を意味してもいた筈。その分の短期のリスクマネーがこれら2社に回ったというのが上場後の株価堅調の背景なのかも知れない。

ここに来て悪役を演じたソフトバンク株も徐々に落ち着きを取り戻しつつある。高配当利回り銘柄であり続けることが株価形成の前提になるだろうが、株価が下げれば高配当の恩恵にあずかり、上げれば短期マネーにとってはキャピタルゲインを得ることができる。流動性は申し分なく、適度な株価変動を重ねているとの印象がある。今年のIPO銘柄は90銘柄となったが、ソフトバンクをはじめその半数以上が公開価格を時価が下回ってきたようだ。これを投資チャンスと見るかどうか、これは投資家の判断に委ねられる。これを全体相場の環境悪の中で一時的な現象と見るのかどうかだが、既にPERやPBRといった指標面でもかなり割安な水準になった銘柄も見出せる。相場に変動は付き物だが、時間分散しながらそうした割安感の出てきた銘柄に投資するのも一法だろう。

かくして2018年も残りわずかになってきた。年の瀬の慌ただしい中、ご愛読賜り心より感謝申し上げます。来る2019年が読者の皆様にとって良い年となることを祈願して本コラムの締めくくりとしたい。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)